女の部屋

武田泰淳

女の部屋

武田泰淳

早川書房

昭和二十六年三月二十日　印刷
昭和二十六年三月二十五日　發行

女の部屋
定價　貳百拾圓

著者　武田泰淳
發行者　早川清
東京都千代田區神田多町二ノ二
印刷者　川口芳太郎
東京都港區芝三田豊岡町八

發行所　早川書房
東京都千代田區神田多町二ノ二
電話神田(25)一六八〇番
三一八四番
振替東京四七七九九番

図書印刷株式会社・印刷・製本

女の部屋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

目次

女の部屋……七
椅子のきしみ……四五
筋肉……六七
情婦殺し……一〇三
めがね……一五一
迷路……一七九
うまれかはり物語……二二七
あとがき……二九九

女の部屋

日曜の午前十時、三階の花子の部屋ではニコライ堂の鐘の音がよくきこえた。狹い部屋を汚ながる山川に對して、花子はその思ひもかけぬ西洋風な音色だけは自慢できる氣がした。カランコロンと鐘の音がのびやかにひびきわたつてくる、その方角に窓があつたが、少しはなれて建つてゐる裏手の三階にかくれて、堂のドォムは見えない。夜になると高々と中空にかがやきだすドォムの上の十字架の青色ネオンは、むろんそこからは見られなかつた。日曜のその時刻に、その鐘に目をさますことがなければ、ここが有名な教會堂のあたりとは氣づかぬにちがひない。それ程この部屋の有樣が、白々と清潔な線を延ばしてゐる聖橋(ひじり)や、重々しく四角ばつてうづくまる湯島の聖堂、それに異國風な綠色にふくらんでゐる教會の丸屋根、その一角のひろびろと打ち展かれた美しい風景とは似ても似つかぬものであつた。

前の下宿人が騰寫印刷に精出したことがあり、そのしみ油が、黑々と壁についた墨の斑點から、古い地圖のやうにひろがつてゐた。かつて印刷機を載せた臺が今も一つだけ殘されてゐて、それ

が五疊ばかりの部屋の四半分を占めてゐる。ビッシリと黑一色に染まつた粗末な臺の平面と、その四本の細い脚のあたりにはアルマイトの炊事用具や化粧品の容物、ビイルや日本酒のビンが、ガラスや金屬の樣々な色彩を光らせてかたまりあつてゐる。

「この部屋なんだか臭いな」はじめて訪問した花子の弟が暗い階段をのぼりつめ、襖がはりの板戸をガラリとあけたとたんにさう言つた。

「だつて、ここには臭素がゐるんだもの」

つっ立つたまま足をふみ入れぬ弟に花子が笑ひながら言ふと、山川も「臭素花子がゐるからな」とすぐ言葉をそへた。新興宗教の話が出て、その宗祖には男がいいか女がいいか冗談の最中であつた。この部屋に絶えず漂ふ臭氣のでどころを、クン〳〵鼻を鳴らして嗅ぎあてようとする山川は、しまひには鼻をすりよせ花子の髪や首すぢまでたしかめた。「わたしの匂ひだと思つてゐる」と花子は怒つて後じさりする。「にんにくぢやない？」「ちがふさ。もつと悪い匂ひだよ」「大根かな」「ちがふ。君また御飯を殘したままにしといたな」「アッ、さうだつた」そんな騷ぎのあと、宗祖はもじられていつか臭素と化したのであつた。

冬は大根、夏は胡瓜、十圓買つただけで食べ切れなかつた野菜が次第にちぢかまり、氣味わるく變色して、かすかな匂ひを寢てゐる枕下に流した。釜の底、ふかし器の隅、蓋はしめてあつてもれ出す濃厚な臭氣の方角に、山川が目をやると、花子はもじ〳〵と膝をうごかして見つかつ

たことの具合わるさを正直に示した。白い米飯の塊りはほとんど見事といつてよいほどの變化を見せ、或る部分はうす青く、ある部分は黄紅色、そしてうぶ毛のやうなかびを生じて、高山植物の一種を思はせた。「御飯をくさらせたら目がつぶれる」少女時代にばあやから言ひきかされた文句をそのつど口にしながら、やはり彼女は始末を怠つた。

鍋の水に漬けて忘れてゐたもやしが日毎に匂ひを增すことがあつた。白濁りした液體はやがてブツ〳〵と油をうかべはじめる。花子は腐り傾いて使用できぬ物干臺へソッと鍋を出す。そして窓を閉めておく。雨水がいくらか液體の臭氣をうすめる、しかし陽が射すと更に堪へがたい異樣な匂ひを加へた。氣がついた山川が半身のり出して鍋の水をあけようとして思はず中途で手をはなした。それほど液體の反撥がはげしかつたのである。

「水をこぼすからいけないのよ。底に沈んでればよかつたのに」

困り切つてドギマギする女と近々と向ひあつたまま、山川はタオルを鼻にあててうなづくばかりであつた。「ゴミ箱に棄てれば近所の人に怒られるし、遠くへ行くにも鍋持つて歩いてるあいだも匂ふし。奥さんに見つかつたら大へんだし」

「便所がいい。水洗の水を流しちまへばわかりやしない。奥さん今ゐないだろ」

「勇氣を出して、さうしようかな」

男が聲をいくらか荒だてると、花子は悲壯な面持ちで鍋をかかへ、追はれるやうに階段を下り

て行く。

原因が不明なこともあつた。腐敗した飯を棄てても室内の臭氣は變らなかつた。「これかな」男はながいこと栓をしたままの鹽辛の容物を食卓からとりあげた。土產用の茶褐色の小さな燒物に中味があるかどうかもたしかめず、物干臺の下にまだ家も建たぬ空地、燒けのこつた灌木の茂みの中へバサリとそれを投げ入れた。惡臭はまだ消えなかつた。「それぢや、これかも知れない」物干臺の青黑く朽ちた板の上に赤錆びた口をひらいてころがされてゐる罐詰を、次から次へと、力一杯投げすてる。その山川を、花子は「へんね〳〵」と心配げに小首をかしげて眺めてゐる。すべての詮索もむだであつた。匂ひは少しうすまるかと思ふと又ねばつこく部屋にみちた。まるでいら〳〵する花子を嘲笑するやうに、それは襲つて來た。

苦笑して不機嫌に寢ころんでしまつた山川の傍によりそひ花子は「もしかしたらこの臭い部屋が嫌になつて、このひとはもうここへ來てくれなくなるかもしれない」といふ暗い不安に、またしてもとりつかれるのであつた。そのやうにして白痴のやうにだまりこんで、ヂッと考へこんでしまふのが、一日に二三回は起きる彼女の習癖である。自分の好きな男がいつかきつと自分のもとから離れ去つて行く、それは自分がせつかく苦心して探し出した部屋からやがてかならず逐ひ出されるであらうといふ豫感と共に、何かしら信念に似て彼女の胸にこびりついてゐる重苦しい不安なのであつた。部屋を得ることは男を得ることであり、部屋を失ふことは男を失ふことであ

る。そのいぢわるく密着した二つの不安は重なりあつて重量を増し、兄の家をとび出して自活する彼女の小柄な全身を、いつもおさへつけてゐた。

すばやく機轉を働かせられるたちではなし、ふりの客に愛想の口もほとんどきかなかつた。ついこないだやめた酒場では飲み役を一人でひきうけ、出される酒は、いくらでも飲みほした。二十五にしては子供くさい丸顔に大きな瞳をすゑ、無言でコップをあける彼女を、客たちは面白がつたり、氣味わるがつたりした。可憐とも見え圖太くも見える彼女をよく〳〵觀察したあげく、店のマダムは「あなたといふひとは、あなたの内容がよつぽどわかつたお客でなきやとてもつきあへないわ」と嘆じた。そんな客は物好きな學生以外にあるわけはなく、時たま金のある老人が「妾にならないか」と口說くばかりであつた。

「君は丈夫だな」と山川はよく感心した。「君は全く丈夫だよ」

すると怨めしげに男を睨んでゐてから（時には瞼のふちに涙までにじませ）いきなり肉づきのよい手をのばして相手の顏を正面からつかむか、ひつかくか、それとも腕や肩をドス〳〵たてつづけに毆りはじめる。

「どうしたのかね」女の意向はよくわかつてゐても、男はさうたづねるより仕方なかつた。

「丈夫といふことはつまり馬鹿つていふ意味でせう。わたしのこと嫌ひなのね。そんなこと言つて」

「さういふわけぢやないよ。ただ丈夫だなと思ふからさう言ふ……」
「いいわ。丈夫々々つてそんなことばつかり言つて、一寸も綺麗つてほめてくれない。やつぱりわたしのこと好きぢやないんだな」
「誰だつて面と向つて綺麗だなんて言へやしない。さうだろ。よく考へて見ろよ」
「ウソよ。綺麗だと思つてれば少しはほめるはずだわ。つまらないな」
必死の形相は怒氣を示すより多くは悲哀にこわばつた。男のなぐさめもまるでうけつけない。しばらくは身じろぎもせずにゐてから花子は「やつぱりわたし馬鹿かな。丈夫だからな」とあきらめたやうにつぶやく。
花子は山川との戀愛の結果、墮胎手術を三度うけた。いつも同じ醫者だつたので、あまりの短期間の連續に商賣はぬきにして手術はしない方がと醫師はすすめた。全身麻醉はむろんかけない。入院の設備もない小醫院、看護婦なし醫師夫婦だけの名ばかりの手術室で、三度目は完全に氣絶した。悲鳴をあげてもだえる花子を「何て大げさなひとでせう」と冷くたしなめてゐた醫師の奥さんも、失心してなかば硬直した彼女の身體をまへにして狼狽した。それでも三時間ののちには電車にゆられてやつと家までたどりつき、その翌日は二階から階下まで、湯たんぽをかかへてころげおち、又三十分ほど氣を失つてゐた。山川も主婦もゐない板の間に、自から意識をとりもどすまでただひとり倒れ伏したままであつた。山川が感心し、花子も厭々ながら自分の人なみすぐ

れた健康をみとめねばならなかつたのは、その經歴のためであつた。
「わたし拷問なんて平氣だと思つたわ。だつて氣絶すりや痛くもなんともなくなるもの」彼女は女特有のその經驗を得意さうに弟に語つた。「姉ちやんなんかえらいな。もし入黨して警察につかまつたつて大丈夫なんだから」
「氣絶するまでが大へんだな」社會主義者の弟は、憂鬱さうにうつむいてゐた。
「そりやとつても大へんだから。もう二度とやりたくないわ」
そんな無邪氣な豪語をするくせに、花子には人一倍氣弱な一面があつた。部屋も男も失つてしまふ未來を怖れて想ひつめる日が多いのは、その單純なあらはれである。富豪の父の手一つで母なきあとの少女時代、甘やかされて育つたためか、あくどいこと、押しづよく他人の意志をふみにじることができない。少しでも手練のある相手に人情がらみで來られれば手も足も出ない。
その無抵抗性と思案ののろさがいれまじり、つひには呆然として時間の經過に身を委ねてしまふ。その結果、おかしいほど下宿の主婦などに氣を使ひながら、わが一生に關してはおそろしい無計畫におち入りがちであつた。彼女の保護者であるべきはずの畫家山川も、こんな彼女の性格を、どうとりさばいていいか、判斷に迷ふのである。
小田急沿線の旅館の裏部屋から、神田の商店街の三階へ引越してもう一年に近い。前の下宿を逐ひ出されたのは、泥醉のためである。勤めの晩い夜、前後不覺に醉つて歸つても、ふだんなら

旅館の主婦へ丁寧な挨拶は忘れたことがない。家を失ふ恐怖心はルーズな彼女の日常神經を、その點だけはピリリとひきしめてゐた。その夜は驛前でチンピラに襲はれ、泥路を逃げまどつて足指から血を流してゐた。玄關にたどりついてからは、疊や廊下を這つては休み一息ついては又這つた。手足やスカアトにこびりついた血と泥は、涙や汗と共に、裏部屋までの曲りくねつた家内に、動物があばれたやうな痕跡を殘した。物も言へぬ昏迷狀態で、大切な「ただいま、花子です」の一句がどうしても聲にならなかつた。二十女の酒量を越しても、客の酒代をかさませなければ月給がもらへない。お店での彼女の特殊任務を理解できぬ以上、誰が見てもふしだら女の許しがたい醉態であつた。

夜半の女の一人歩きは、新生文化國家の首都でも危險きはまりない。都電の停留所へ二分とからぬ今度の三階を選んだのも、短い期間に豐富に積んだ苦い經驗に訓へられたからである。

燒け殘つた五軒一組のその商店街では、防火用の赤銅トタンが、通りに面した表側全體にピッシリと貼りつけられ、附近の主婦や娘たちの買物でにぎはふ黃昏どきには、ギラ〳〵と赤紫色に金屬の光澤を放つた。窓の上までのしあがつてゐるその手輕な防火壁のおかげで、三階の窓から電車線路を見下すことはできない。少しひつこんだ三階の窓と防火壁の間には、二尺ばかりの張り出しがあつて、枯葉を二三枚つけた灰色の植木がぶざまな姿をさらしてゐた。植木を守つたはずの木箱はバラ〳〵にこはれ、ずり落ちた泥が乾いた街の風に吹かれ、それでなくとも埃つぽい